



アルジェリア独立戦争におけるティムガッド新都市 実現の軌跡 : 建築家ロラン・シムネと「不可能な使 命」(1958~1960)

惣田, くみ子

(Citation)

美術史論集, 4:44-53

(Issue Date)

2004

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010367>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010367>



アルジェリア独立戦争下におけるティムガッド新都市実現の軌跡⁽¹⁾ 建築家ロラン・シムネと「不可能な使命」(一九五八〜一九六〇)

《キーワード》都市計画 アルジェリア 現代建築

惣田 くみ子

はじめに

近年、発展を目指す貧しい国々への援助をはじめ地震などの災害、または戦後の復興支援の一部として、まちの再建に必要な資材および技術者を送る機会が増えてきている。様々な国々の多様な価値観を持つ者たちが、対象とされる地域へ派遣され活躍する様子が伝えられるが、いつの時代も限られた資金で現地の慣習をふまえながら作業を進めていくのは至難の業である。今から約半世紀前、若十三十一歳のフランス人建築家ロラン・シムネ (SIMONNET, Roland, 一九二七〜一九九六) は、当時アルジェリア総政府で都市計画家として働いていたピエール・ソールから、アルジェリア独立戦争下という状況からしてほとんど「不可能な使命」と明言されながらも、ティムガッドに新都市を建設するという一大事業を引き受けた。現在において、二〇世紀後半のフランス建築史上に名を留める偉大な

建築家の一人に数えられるロラン・シムネとは一体どのような人物だったのか。

アルジェリア在住フランス人の五世であるロラン・シムネは、ル・コルビュジエや安藤忠雄と同様、独学で成功をおさめ、自身の作品とその個性によって時代に確かな痕跡を残した。今日では、主に彼がアルジェリア独立戦争後フランスに移住してから手がけた三つの美術館、ヌムールのイル・ド・フランス先史博物館(一九七六〜一九八〇)、ヴィルヌーヴ・ダスク北仏近代美術館(一九七九〜一九八三)、パリ・ピカソ美術館(一九七六〜一九八五、ここでは改築・内装整備)によって名を知られている。またパリ郊外のサン・ドニ・バジリック集合住宅群(一九七七〜一九八三)⁽²⁾や南仏にあるマルセイユ国立高等バレエ学校(一九八五〜一九九二)も彼の代表的な建築作品である。フランス以外ではアルジェリアで最も多く建設しており、首都アルジェのジェナン・エル・ハサン仮設集

合住宅（一九五六―一九五八）や古代ローマ遺跡の隣に位置するティムガットの都市計画があげられる。マダガスカルではタナナリブ大学の学生寮や、大学都市内の施設（一九六二―一九七二）を建設した。若い頃、アルジェ都心にあるスラム街の構造を、そこに住む人々の中に入りながら研究してきた経験を持つ彼は、費用の儉約、土地への配慮、光のヴァリエーション、などを考慮にいたした「簡素さが持つ端麗さ」を備えた建築を具現化しようと試みてきた。常に人間そのものに目を向けてきたロラン・シムネの信念、それは「ヒューマニズム（人道主義）」そのものであった。

本稿は、アルジェリア独立戦争の下で、身の危険を感じながらも生涯「自国」と言い続け、心から愛したアルジェリアでロラン・シムネが請け負った最大規模の公共建設事業に焦点を当て、他民族のために、また他民族と共にまちを造り上げていく意義について、考察しようとする。

一、都市計画の歴史的背景と選定地の立地的条件

ティムガットは、北アフリカの国々の中でも国土の広大さを誇るアルジェリアの首都アルジェから南東約五五〇キロメートル、平均標高約一、〇〇〇メートルに位置している。農耕地帯の中心地で自然貿易の地でもある。実際のところ、一九四八年よりティムガットの住民が、電気・ガス・水道といった先進的な機能を備えた住居に住めるよう新住宅の建設計画が検討されていたが、その時、ロラン・シムネはまだこの計画に加わってはいなかった。当初予定され

ていた土地は低地の上に、雨季以外には水のないウエードウ（またはワジ）と呼ばれる水無し川になるため却下された。そして一九五七年、ついにアルジェリア都市計画・古代遺跡事業は、ティムガットに残る古代ローマ遺跡群六〇ヘクタールにおよぶ廃墟の保護と、この町で多くは農業に従事しながら生計をたてている人々を設備が整った所で生活できるようにするために、新都市建設を決定した。そして紀元後一〇〇年にローマ皇帝トラヤヌスの命により建造された都市タムガディより北一、〇〇〇メートル平行した新地に、ティムガット新都市が建設されることとなった（図1）。

この一大計画を実現するにあたり、一九五六年から着手していたジェナン・エル・ハサン仮設集合住宅によって注目を浴びていたロラン・シムネに、都市計画家として、また建造物の作成者として白羽の矢が立ったのである。最終的にはロラン・シムネただ一人が、都市計画から施工に至るまでの全ての過程の指揮をとることになった。彼はまず自分の足で細かく現地を調査することから始め、「ティムガット市整備計画作成に関する準備調査」を作成した。この調査記録の内容は「地理、気象、人口統計、住民の活動、住居、土地の習慣、史跡」と多岐にわたっていた。

二、新都市編成の形態

生活に必要な住宅、商業センター、マウル風呂、教育機関、スポーツセンター、回教寺院、宿泊施設、経済業務関連をはじめとするいくつかの公共機関、技術関連施設（実験用果樹園）、家畜小屋、

農作物の貯蔵庫(サイロ)などタイムガッド新都市の全ての機能は、約六ヘクタールの表面積を占める長方形のプラン内に収められている(図2)。上水道の配管・下水の処理機能、雨水再利用のための放水路に関しては、もともとあった「古市場」の位置を変えることにより新都市まで届くよう経路を変更した。

新都市内の道は、二、二六メートルから三、九六メートルまでと非常に狭い(図3)。理由は以下の五点に集約される。第一に風や太陽からの保護があげられる。日照りが厳しく特定の農作物の栽培以外には植樹が困難なため、建造物の壁によって影をつくり、涼めるようにする必要があった。第二に道の外装費用の削減である。貴重な雨水は歩道傍の溝に無駄なく集められるようにするため道には完全防水加工が施されており、土地の均一な傾斜はこうした雨水の収集に適していた。第三に水道の鉄管・電線の個人宅への分岐管・配線の節約が考えられる。第四の住宅地の歩道に面した壁面に窓がないのは、個人宅のプライバシー保護がまず上げられる。慣習の面で、回教徒の女性は「他人に見られること」を嫌う傾向があるため、特にシムネはその点に配慮した。そして第五にまちの「人間規模」の保持があげられる。こうして綿密に推考した結果、以上の点を基本として、ロラン・シムネは新都市の設計図を作成していくことになった。

三、快適な住居とは

ロラン・シムネは一九五一年に、アルジェ郊外ブザレールのト

シ邸を建設して以来、次々と手がけた個人および共同住宅によって名を知られるようになった。ダニエル・アブルケール邸(一九五三〜一九五五)のような現代的な快適さを備えた邸宅も庭の造園に至るまで全て自分で指揮していたが、彼が主に得意としたのは、あくまで土地の文化・慣習を重視した、アルジェリア人にとつての快適な住居の建造であり、それは当時北アフリカの国々で多く見受けられたように、突如として欧米諸国から建築家が来て他地域―いわゆる他文化―の者が求める快適な居住空間を押し付けることを決してしないということだった。ロラン・シムネは二四歳で現代建築国際会議のアルジェグループ(Groupe C.I.A.M. d'Alger)に加入し、当時、グループの中心的人物だった、ジャン・ドウ・メゾンスルらと親交を深めていった。一九五三年にフランスのエクス・アン・プロヴァンスにて開催された第九回現代建築国際会議で、アルジェグループが発表する主題として首都の中心部にあるマイエディンのスラム街に関する調査報告書を作成するに際し、この「まち」の特異性を、「住む」「働く」「体と精神を修養する(みがく)」「往來する」の四つの視点から分析することになった。そこでグループ内で一番若かったロラン・シムネとスイス人の友人に、そこに居住する人々を訪れ、質問しながら、すでに一覧表に記入されていることから、⁸⁾ 今までただ貧しいという印象しか持っていなかったスラム街で、生涯建築家として生きていくうえで根本となるかけがえのない教訓を見出すことになった。後に彼はこう回想している。

「自発的な住居、創意工夫の豊富さ、節約性、空間の生かし方、植物への配慮、区域内の組織化された生活、素晴らしい連帯感を目の当たりにして私は驚愕しました。もちろん、衛生面は早急に対処しなければならぬ問題でしたが、希望の教えはそこにあり、熟慮反省なく、思い込みによって環境を壊すことを戒めていました。こうして、私が常に心にとどめている「さらに良いものが提案できるという確信がない限り、何もこわさない」という信念は、エクスで開催された会議で発表されたパネルに書いた事項からきています。アルジェから受けた教えは、その後の私の全ての建築作品に多大かつ決定的な影響を与えました。」⁹⁾

ロラン・シムネがアルジェリア人のベルヌウ家の人々と、一ヶ月間一緒に生活した後にエル・ビールに建てたベルヌウ邸（一九五六〜一九五七）は限られた予算の中から最大限に彼らの生活様式に合わせた家を具現化したものであった。そしてアルジェのスラム街に住む人々を、先進的な機能を備えた集合住宅に住ませるまでの仮の入居先として建てられたのがジェナン・エル・ハサン仮設集合住宅¹⁰⁾である。非常に限られた費用のなか、急斜面の土地に、最終的には約三〇〇世帯分の住居を建設するという貴重な経験が、ティムガッド新都市計画への集大成へとつながっていくのである。

四、ティムガッド新都市における住居構成と生活区域

ロラン・シムネがティムガッドの人々に配慮して設計図を作成し

たことを明確にするには、住宅に焦点を当てると理解しやすい。個人住宅も集合住宅も全て南か東を向いており、集合住宅においては北側が少し開いているものもあるが（図4）、どの住宅も西側は強い西日を避けるために閉ざされている（図5）。個人住宅・集合住宅を合わせて、約二、五〇〇人が入居できるようになっており、それぞれの住宅には、土地の慣習、住民の生活パターンや仕事をふまえた七タイプの居住空間が考案された。各住居の構成は以下のとおりである。

個人住宅

Aタイプ — 個人住宅『平屋三部屋』

中が直接見えぬよう曲がった入り口で、その場所には天井がなく空が見えている。トルコ式便所と洗身用の水場、深い洗い場がついた共同部屋、炉辺、壁面組み込み式クローゼット、二寝室、垣根で囲まれた庭（四二平方メートル）（全七六件）

Bタイプ — 個人住宅『平屋二部屋』

Aタイプと同様の配置だが、寝室が一つ（二一平方メートル）（全六六件）

Cタイプ — 個人住宅『二部屋と馬小屋』

Bタイプと同様の配置だが、馬小屋とそれに伴う独立した入り口および庭に続く通路がある（三一平方メートル＋二〇平方メートル）（全三二件）

Dタイプ — 個人住宅『二階建て二部屋』

中庭、小屋、便所・シャワー、洗身用の水場、炊事場付き共同部屋、壁龕付きの階段、屋根裏部屋（壁面組み込み式クローゼット）、洗面所（三平方メートル）（全五件）

Eタイプ — 個人住宅『集合住宅一階部分、二部屋』

一寝室、炊事場付き共同部屋、仕事台、洗い桶、化粧室、便所、シャワー、洗面所、囲い付き庭（二九平方メートル）（全二〇件）

集合住宅

集合住宅は、三階建てとなっている。

Fタイプ — 集合住宅『二部屋』

客間、台所、洗い桶、ロτζジア付き応接間、化粧室・便所、シャワー・洗面所、壁面組み込み式クローゼット（二九平方メートル）（全二二件）

Gタイプ — 集合住宅『三部屋』

Fタイプと同様の配置だが、一寝室とロτζジアがさらに付いている（四三平方メートル）（全二二件）

個人住宅および集合住宅共同使用の洗濯場と仕事場は、集合住宅の一階部分に設けられた。住宅総数が一七三件と収容予定人数に対して非常に少ないように思われるが、当時のアルジェリアの地方の集落で、限られた空間内に比較的大家族が一緒に住んでいた事実を

思えば、納得できるのである。ティムガッドの多くの住民にとって上記の住宅は便利な機能を備えた「先進的」な住居であったといわれている。

五、施工時の問題点

施工時に対処しなければならぬ問題はいくつもあった。その中でも特に重要視されたのが、まず失業者と他の地域からの避難者に職を与えるために多数かつ知識の乏しい働き手の絶対雇用。次いで戦争で治安が悪化し輸送が困難なため必要資材の現地生産（プレハブ作業）。そして元からの景観および古代ローマ遺跡を損なわぬよう土地との調和。以上の三点であった。遺跡への配慮は設計段階でロラン・シムネが対策を練ったが、残りの二点がともすれば致命的であった。

ほとんど学校へ通っていない大多数の住民にとって、読み書き、まして測量などの作業は不可能であった。そこでロラン・シムネは以前、同様の人々を雇い建設した煉瓦造りのサント・マルグリット・マリー聖堂、そしてパルパン（コンクリートブロック）と煉瓦造りのジェナン・エル・ハサン仮設集合住宅での施工方法を取り入れることにした。煉瓦もパルパンもひとつひとつのブロックの積み上げ、繰り返しによって建物を形作っていくことができる。この単純作業を工法として取り入れることにより雇用問題は解決された。

建設作業はアルジェリア独立戦争の真只中に着手され、予算不足・資材不足は避けて通ることができなかった。しかし建造物の安

全性の確保は必須である。鋼の使用は極力控えられたが―鉄筋コンクリートを使う手段など到底なかった―コンクリートに必要な骨材は、近場の石切り場から採掘された。ロラン・シムネは「建造物の規則性」を比較的大きな断面の、鉄筋を用いないコンクリートブロックの積み重ねによって表現していった。ジョイントに関しては各ブロックに凸面・凹面を作ることにより、外れないよう工夫され、ブロックでつくられた壁は等間隔に立てられた柱の溝部分に組み込まれることにより、固定された。新都市の建造物はそれぞれが変化に富んでいるが、全て同じ資材で建てられている。このように同一の建築資材を使用することにより、建物の形状の多様性の中にも大きな統一感もたらされた。簡素さはロラン・シムネの生涯の建築作品に共通して見られる特徴だが、それには建物の形を単純化することにより仕事をしやすくするという理由と、さらに土地の素材を使用することにより住民自身による建物の修繕・維持を可能なものにするという目的があった。

おわりに

二〇世紀はとりわけ変動の激しい時代であった。新技術の開花と様々な建築材料の出現により、建築としての表現の幅も広がっていた。一九二〇年代に入り、ル・コルビュジエが「新建築の五原則」を提唱し、一九二九年にパリ郊外に建てられたサヴォワ邸において、ピロティ、屋上庭園、自由なプラン、水平連続窓、自由なファサードといった先記の五原則を具体化した作品を目にしてからは、若い

建築家たちの間にル・コルビュジエの単純なフォルムを持つ建築を支持する者が増えていった。その波動が国際的なものとなっていた一九五〇年代、ロラン・シムネもまた、ル・コルビュジエの著書を読み、彼の建築作品に賛同していた。「モデュール」は、ル・コルビュジエ自身がアルジェのカスバを歩き、調査・計測して生み出した「人間規模」の測量法だが、この「人間規模」の町並みも、白く簡素な壁面を持つ建物も、現代建築として高い評価を得ていたものは、アルジェリアに生まれたロラン・シムネにとって既に馴染み深いものだったのである。

タイムガッドの新都市建設は、当初「不可能な使命」といわれていたにもかかわらず、数々の困難に直面した際のロラン・シムネの機知によって切り抜け、遂行されることができた。彼は常に「外地からの技術をそのままやみくもに取り入れるのはよくない。現地の工法を使うべきだ。」¹⁾と明言しており、それは費用削減という理由からだけではなく、その土地の人々が先祖から受け継いできた伝統の中にこそ、土地の風土・気候に適した建築法が見出せることを知っていたからである。このような本質的な部分に常に目を向け、さらに先進的な技術・知識と融合させるという考えこそ、外地のものが出向地のまちづくりを目指す上で最も忘れてはならないことだといえるであろう。

註

(1) 本稿はパリ第四大学大学院博士課程美術史学科在学中の二〇〇一年九月に博

士号取得のために提出した博士論文「ロラン・シムネ（一九二七～一九九六）：作品とその影響力」（Roland Simounet (1927-1996) : oeuvres et rayonnement) の一部を翻訳・修正したものである。

(2) 二〇〇一年四月八日、ピエール・ソール (SAUR, Pierre) 氏とのインタビューより。

(3) ロラン・シムネより五代さかのぼる祖先は、フランスのベルジュラック出身で、一八三一年頃仏軍の薬剤師及び薬草販売人としてアルジェリアに移住した。ロラン・シムネ自身も植物に詳しくかった。(一九九五年十一月九日、ロラン・シムネ氏との会話より)

(4) 続いて第二期は一九八三年から一九八五年にかけて施工。

(5) Services de l'Urbanisme et des Antiquités de l'Algérie

(6) Enquête préparatoire à l'établissement du projet d'aménagement de la commune de Timgad 一九五八年頃 (公の発行物ではなく)

(7) 現代建築国際会議のアルジェグループ (groupe C.I.A.M. d'Alger) は一九五二年に創設された。

(8) 現代建築国際会議 (C.I.A.M.) にて用いられた都市計画関連の一覧表は、ル・コルビュジエが建築刷新のための建設者会議 (A.S.C.O.R.A.I.) の一環として、都市計画プランを分析しやすくするために考案したものである。一九四九年七月ベルガムで開催された第七回現代建築国際会議にて提案された。

(9) «La leçon d'Alger», *La Ville*, No.5, 1995

(10) 当時は仮設住宅として建設されたのだが、コンクリートブロックと煉瓦を用いて頑丈に建てられていたためアルジェリア独立戦争後も人々が住み続け、一九九〇年代も「住宅」として存在していた。

(11) Virginie Picon-Lefebvre, Cyrille Simonnet, «Entretien avec Roland Simounet», *Les architectes et la technique*, Ministère de l'équipement du logement des transports et de la mer, Association grenobloise de recherche architecturale, novembre 1989

〔付記〕

参考文献としては、ロラン・シムネ氏自身が自分の建築作品について記した Roland Simounet, *Roland Simounet : D'une architecture juste 1951-1996 - monographie d'architecture* —, Paris, Le Moniteur, 1997があげられるが、彼の建築作品についての深い研究資料は存在しなかったため、博士論文作成に際し、ロラン・シムネ氏没後は彼と親しかったイヴェット・ラングラン氏ならびにロラン・シムネ氏の仕事仲間であったミッシェル・シャルモン氏、ピエール・ソール氏また彼の友人だったアンドレ・ヴォーガンズキー氏、ジャン・ルイ・ヴェレ氏他多数の方にお話をうかがい、お世話になった。博士論文自体は主に多くのインタビューをはじめ、ロラン・シムネ氏が残した一次資料、建築雑誌に掲載された記事などをもとに執筆した。

惣田くみ子 (そうだ・くみこ) 一九六八年生まれ

一九九二年九月 国立ルーヴル学院卒業

一九九四年九月 パリ第四・ソルボンヌ大学卒業 (学士号取得)

一九九五年九月 パリ第四・ソルボンヌ大学大学院卒業 (修士号取得)

二〇〇一年九月 パリ第四・ソルボンヌ大学大学院卒業 (博士号取得)

二〇〇二年九月から 神戸大学大学院文化科学研究科在学 (研究生)

二〇〇三年四月から 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来

センターの震災資料専門員として勤務

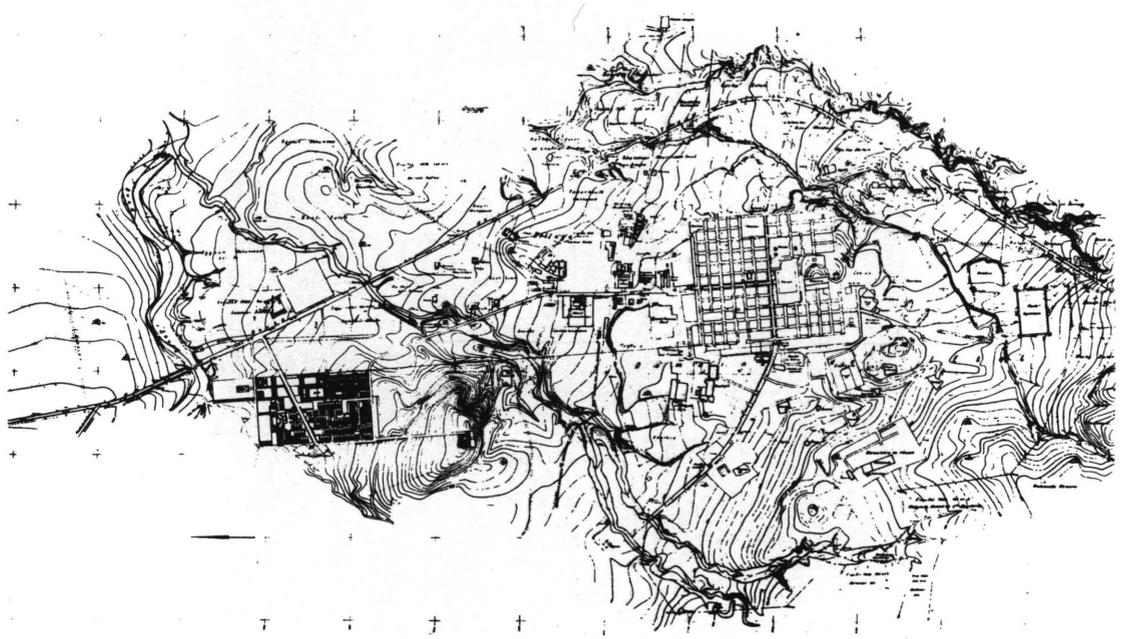


図1 ティムガッド古代ローマ遺跡およびティムガッド新都市全体図

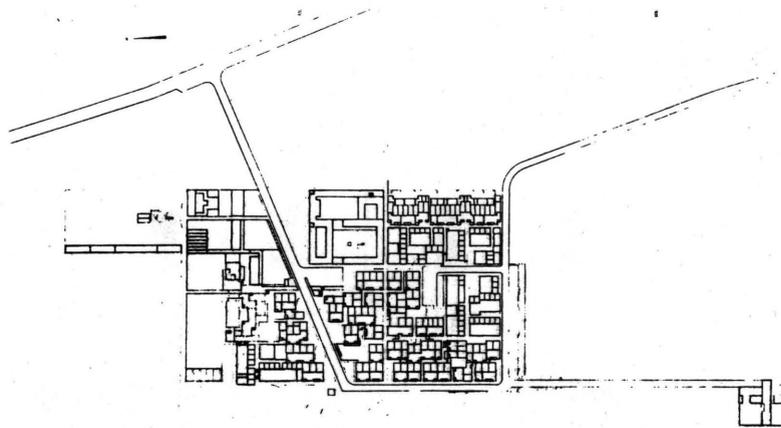


図2 ティムガッド新都市平面図

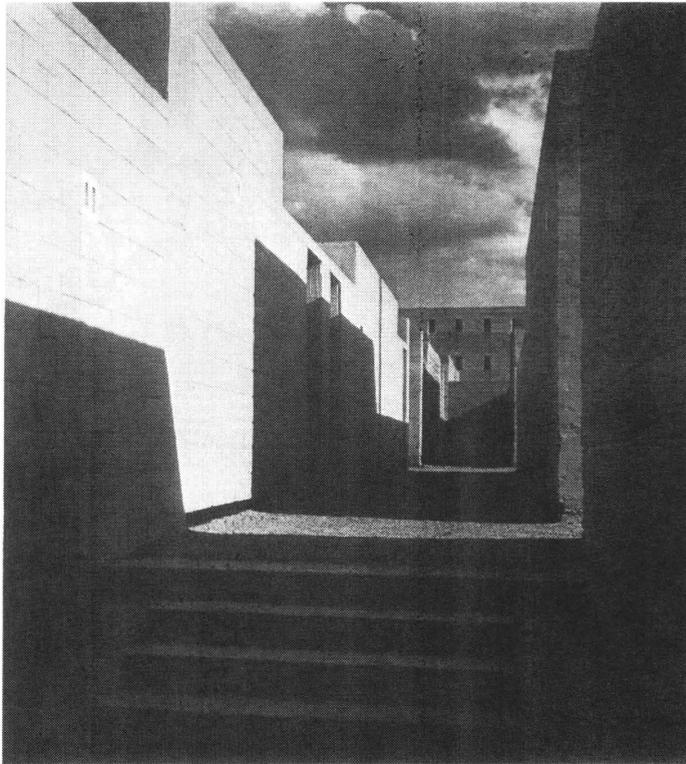


図3 ティムガッド新都市内の道



図4 三階建て住宅北側立面

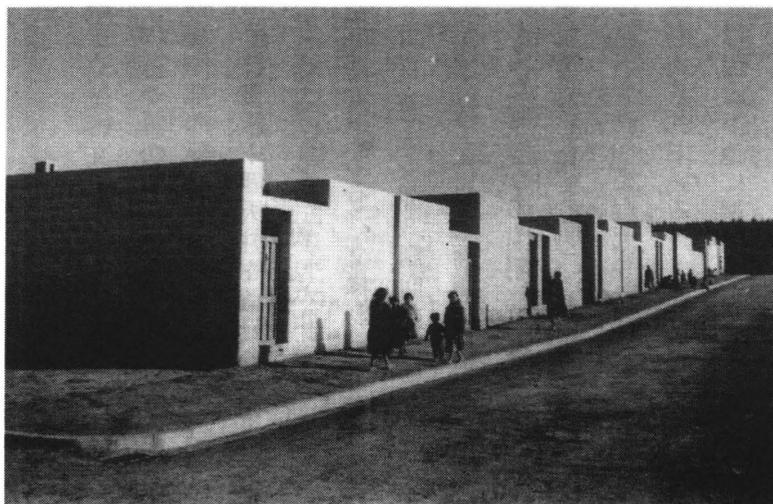


图5 集合住宅西侧立面